

令和3年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第4号（7月）

令和3年6月30日
山形県病害虫防除所

[概要]

普通作物：葉いもちの発生量はやや多い予想です。育苗箱施用や水面施用で予防粒剤を使用した水田でも、本田の見回りを徹底し、早期発見・早期防除に努めてください。
斑点米カメムシ類の発生量はやや多い予想です。雑草での増殖抑制のため、畦畔・農道等の継続的な除草対策を徹底してください。
園芸作物：ももせん孔細菌病はやや多い予想です。発病部位（果実、葉等）は見つけ次第摘み取り、適切に処分するとともに、薬剤散布を徹底してください。
メロン斑点細菌病はやや多い予想です。発病葉は見つけ次第摘み取り、適切に処分するとともに、薬剤散布を徹底してください。

次の発表は7月28日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病害虫名	発生量
いね	葉いもち 紋枯病 稲こうじ病 斑点米カメムシ類 コバネイナゴ	やや多い やや多い やや多い やや多い やや少ない
りんご	黒星病 褐斑病 斑点落葉病 灰星病	平年並 平年並 平年並 平年並
もも	せん孔細菌病	やや多い
西洋なし	輪紋病	やや多い*
日本なし	黒星病	平年並
かき	チャノキイロアザミウマ	平年並
果樹共通害虫	果樹カメムシ類（り・も・な・お・か） モモシンクイガ（り・も・な） ナシヒメシンクイ（り・も・な） ナミハダニ（り・も・な・お）	平年並 平年並 平年並 平年並
夏秋きゅうり	べと病	平年並
すいか	炭そ病・つる枯病	平年並
メロン	斑点細菌病 つる枯病	やや多い 平年並
野菜・花き共通害虫	アブラムシ類（夏・す・メ・き） ハダニ類（夏・す・メ・き）	平年並 平年並

* 感染量

下記の病害虫は、防除上注意すべき事項等について記載しています。

作物名	病害虫名
いね	墨黒穂病、フタオビコヤガ、セジロウンカ、コブノメイガ
だいち	ジャガイモヒゲナガアブラムシ
りんご	輪紋病、炭そ病
ぶどう	灰色かび病、晩腐病
日本なし	輪紋病
おうとう	褐色せん孔病、オウトウショウジョウバエ
かき	円星落葉病
夏秋きゅうり	斑点細菌病、炭そ病、褐斑病
すいか	褐色腐敗病、疫病
秋冬ねぎ	さび病、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ
きく	アザミウマ類
野菜・花き共通害虫	オオタバコガ

()内 り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし、日本なし）、お：おうとう、か：かき、
夏：夏秋きゅうり、す：すいか、メ：メロン、き：きく

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	http://agr.in.jp/menu/t/790/	
病害虫発生予察情報	http://agr.in.jp/menu/t/563/	

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和3年6月1日～8月31日

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに記載されている①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等をよく読んで、記載事項を正しく守って使用しましょう。
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用するとともに、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：	○食品安全衛生課(023-630-2160)
	○農業技術環境課(023-630-3419)
	○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)
	○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課
農薬情報は：	○やまがたアグリネット(愛称：あぐりん) http://agrin.jp/
毒物・劇物の相談は：	○最寄りの各保健所
	・山形市保健所(023-616-7261)
	・村山保健所(023-627-1248) 　・最上保健所(0233-29-1257)
	・置賜保健所(0238-22-3872) 　・庄内保健所(0235-66-5478)
	○新型コロナワクチン接種総合企画課(023-630-2662)
公園等病害虫等管理 マニュアルの相談は：	○水大気環境課(023-630-2339)

1. 合成ピレスロイド剤等を使用する場合は、市町村農作物有害動植物防除協議会等で定めた地区に限って使用し、蚕・魚類に対する被害を防止する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるみつばちへの危害を防止する。
4. 農薬の使用後は防除日誌の記帳に努める。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (-)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉いもち	やや多い

<6月14日付け 発生速報第7号発表>

<6月18日付け 発生速報第8号発表>

1) 予報の根拠

ア. 本田での初確認は6月17日（平年：6月23日）で早い。（+）

イ. 6月28日現在の発生量はやや多い。（+）

ウ. 6月18日現在、いねの生育は茎数が多く、葉色は平年並からやや濃い。（+）

エ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は少ないと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

ア. 最低気温が15℃以上で降雨など高湿度条件による葉面の濡れが長時間続くと、葉いもちの感染に好適となる。育苗箱施用や水面施用で予防粒剤を使用した圃場でも、油断せず本田の見回りを徹底し、早期発見に努め、発生を見たら直ちに薬剤を散布する。

イ. QoI 剤耐性菌が全県で確認されているので、薬剤の選定には留意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 紋枯病	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 前年の発生量はやや多かった。（+）

イ. 6月28日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月5日）。

ウ. 6月18日現在、いねの茎数は多い。（+）

エ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

ア. 前年発生が多く見られた圃場や、例年発生が見られる圃場では、圃場をよく観察し、発生が確認される場合は下表の防除要否の目安を参考に穂孕後期又は出穂期の防除を行う。

イ. 薬剤は株元によく付着するよう散布する。

表 防除要否の目安（調査場所：水田中央部） 品種：はえぬき

判定時期	防除の判断基準
穂孕後期	発病株率10%以上で防除
出穂期	発病株率15%以上で防除

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 稲こうじ病	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 前年の発生量は多かった。(+)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 前年発生が見られた圃場や、例年発生の見られる圃場では、出穂20～10日前に薬剤防除を行う。

イ. 銅剤を使用する場合は、出穂期近く及び葉が濡れている時に散布すると薬害の恐れがあるので注意する。

(4) 墨黒穂病

前年発生が見られた圃場では、出穂20～10日前に薬剤防除を行う。なお、銅剤を使用する場合は、出穂期近く及び葉が濡れている時に散布すると薬害の恐れがあるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(5) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ ・アカヒゲホソミドリカスミカメ ・オトゲシホカメムシ)	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 6月後半の巡回調査の結果、畦畔・農道等におけるすくい取り調査では、発生確認地点率はやや高く、平均すくい取り虫数はやや多い。(+)

イ. 水田内すくい取り調査では、発生確認地点率はやや高く、平均すくい取り虫数は多い。(+)

ウ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 畦畔、農道、休耕田等で現在雑草が繁茂しているところでは、速やかに除草対策を行う。

イ. 出穂2週間前頃(7月中旬頃)までに畦畔、農道、休耕田等の除草対策を徹底し、生息場所での密度低減を図る。なお、刈り取った草は放置せずに搬出する。

ウ. 水田内にイヌホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエ類が多い圃場では、斑点米カメムシ類の水田内での発生が多くなるので除草対策を徹底する。

エ. 休耕田等の雑草が繁茂しているところでは、耕耘による除草対策も効果が高い。

オ. アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメは移動性が高いことから、地域ぐるみで一斉に除草対策を行い、地域全体の密度低減を図る。

カ. 出穂期前後の草刈りは、斑点米カメムシ類の水田侵入を促し、斑点米の発生を助長するので原則行わない。やむをえず草刈りを行う場合は、水田の薬剤防除計画に合わせて実施する。

キ. 穂揃期及び穂揃期7～10日後の2回の基本防除を徹底する。なお、圃場の出穂状況をよく確認し、適期に防除する。

(6) フタオビコヤガ (イネアオムシ)

6月後半の巡回調査の結果、発生量はやや少ないが、圃場をよく観察し、発生が多い場合には被害初期(葉先がカスリ状になった時)に薬剤を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(7) コバネイナゴ	やや少ない

1) 予報の根拠

6月後半の巡回調査の結果、発生量はやや少ない。(－)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 7月上旬の水田内における20回すくい取り虫数が100頭以上の場合は防除を行う。なお、乳剤を散布する場合は畦畔等も含めて散布する。
- イ. 薬剤防除を行う場合は、乳剤では散布前に、粒剤では散布2、3日後に畦畔の草刈りを実施すると効果が高まる。

(8) セジロウンカ・コブノメイガ

6月28日現在、飛来は確認されていないが、今後、低気圧や前線の通過に伴って大量に飛来することがあるので、発生動向に注意する。

2. だいず

(1) ジャガイモヒゲナガアブラムシ

6月後半の巡回調査では、吸汁痕(黄色斑点)がわずかに確認された。寄生密度が急激に高まることがあるので、圃場を十分に観察し、今後の発生動向に注意する。

II 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	平年並

<3月17日付け 発生速報第2号発表>

<4月5日付け 発生速報第4号発表>

<5月6日付け 発生速報第6号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 6月後半の巡回調査では、発病葉の発生確認地点率及び平均発病葉率はいずれも平年よりやや低い。(－)
- イ. 6月28日に行った特別巡回調査の結果、発病葉の発生確認地点率及び平均発病葉率はいずれも3か年平均より低い。(－)
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 耕種的対策として、伝染源密度低減のため、発病葉、発病果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。また、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高める。
- イ. 薬剤散布予定日に降雨が予想される場合は、計画を前倒しして降雨前に散布するとともに、梅雨明けまでは、散布間隔を10日間以上あけないようにする。なお、降雨が続く場合には、雨の合間を見て散布を行う。
- ウ. 薬剤散布に当たっては、十分な薬液量(500ℓ以上/10a)でていねいに散布する。また、スピードスプレーヤにより防除する場合は、散布速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 褐斑病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月28日現在、発生は確認されていない（平年初確認日：7月8日）。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 例年発生が見られる園では、発生初期の防除を徹底する。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。
- ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高めるとともに、散布ムラが生じないようにいねいに薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 斑点落葉病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月28日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高める。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

(4) 輪紋病・炭そ病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。また、炭そ病の発病果は二次伝染源となるので見つけ次第摘み取り適切に処分する。

2. ぶどう

(1) 灰色かび病・晩腐病

発病果は、二次伝染防止のため見つけ次第摘み取り適切に処分する。薬剤防除を行う場合は、果房が汚れないように注意して行う。

3. も も

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 灰星病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在、発病果は確認されていない（平年初確認日：7月26日）。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 早生・中生種では、7月中旬から重要な防除時期に当たるので防除を徹底する。薬剤防除を行う場合は、収穫開始時期を考慮し農薬使用基準を遵守する。

イ. 園内の見回りを徹底し、発病果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) せん孔細菌病	やや多い

<3月17日付け 発生速報第1号発表>

<4月15日付け 発生速報第5号発表>

1) 予報の根拠

ア. 6月後半の巡回調査では、平均発病葉率は平年並である。

イ. 6月21日に行った特別巡回調査の結果、一部の園では前回調査（6月7日）から発病果率の増加がみられる。（+）

ウ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

ア. 伝染源となる春型枝病斑は、7月上旬頃まで発生するので、園内をこまめに見回り早期発見に努める。なお、発病枝は見つけ次第せん除し、園外で適切に処分する。また、発病葉や発病果も二次伝染源になるので、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ. 例年発生が見られる園や風の強い園では、防風ネットを設置する。

ウ. 薬剤防除は7月上旬まで約10日間隔で行う。なお、耐性菌出現防止のため、抗生物質は連用を避け、有機殺菌剤と輪用散布する。また、品種ごとの収穫開始時期を考慮し、薬剤の収穫前使用日数を厳守する。

4. 西洋なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	感 染 量
(1) 輪紋病	やや多い

1) 予報の根拠

向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量が平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 梅雨明けまでは重要な防除時期に当たるので、薬液が枝幹部にも付着するよう十分量散布する。

イ. 降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

ウ. キャプタン・有機銅剤による体系防除では、輪紋病菌の感染を防止するため、前回のキャプタン・有機銅剤散布後の積算降水量が100mmに到達する前に次の薬剤散布を行う。

5. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	平年並

< 3月17日付け 発生速報第3号発表 >

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 伝染源密度低減のため、園内の見回りを徹底し、発病部位（果実、果梗、葉）は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高めるとともに、散布ムラが生じないようにいねいに薬剤散布を行う。

(2) 輪紋病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

6. おうとう

(1) 褐色せん孔病

収穫終了後に速やかに被覆資材を除去し、収穫後防除剤を散布する。

(2) オウトウショウジョウバエ

今まで収穫した果実に被害が見られた場合は、今後の発生状況に注意し、収穫が終了するまで薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

7. かき

(1) 円星落葉病

前年発生の多かった園では、7月上旬にも防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) チャキイロアザミウマ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在、被害果は確認されていない。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

7月下旬までの防除を徹底する。なお、幼果とへたの隙間にも薬液が十分付着するように散布する。

8. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメシ・チャバ 初カメシ)	りんご・もも・なし ・おうとう・かき	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の気温は、平年並か高いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 果樹カメムシ類の園内への飛来は、気温や湿度が高い日に多くなる傾向があるので、園内を十分に見回り、寄生状況や被害果の発生状況に注意する。また、成虫の園内への飛来は長期にわたり、7月下旬頃から新成虫も発生して密度が高まるため、成幼虫の寄生や卵塊を見逃さないように定期的に園内を見回る。

イ. 園内で成幼虫の寄生や卵塊、被害果が確認される場合は、薬剤散布を行う。

ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病虫害防除基準」を参照し、カメムシ類に効果のある剤で防除を実施する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) モモシンクイガ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 向こう1か月の気温は、平年並か高いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 7月は重要な防除時期であり、成虫の発生は長期にわたるので薬剤の選定に留意し、散布間隔があきすぎないように防除を行う。特に、前年被害が見られた園では、この時期の防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 第1世代幼虫の加害によるももの新梢被害（心折れ）の発生は平年並である。
- イ. 向こう1か月の気温は、平年並か高いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内を見回り、心折れや被害果は、見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 被害が見られる園では、薬剤の選定に留意し、防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(4) ナミハダニ	りんご・もも ・なし・おうとう	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月28日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 成幼虫数が1葉当たり3頭以上見られたら、殺ダニ剤を散布する。
- イ. 園内の除草を励行し、殺ダニ剤を散布する場合には散布時期を考慮して除草を行う。
- ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達を高める。
- エ. おうとうでは収穫終了後に速やかに被覆資材を除去し、殺ダニ剤を散布する。

9. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) ベと病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月上旬）。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。また、降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

イ. 発病葉は取り除き、圃場外に持ち出し適切に処分する。

(2) 斑点細菌病

降雨が続くと発生が多くなるので、圃場をよく見回り早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。

(3) 炭そ病・褐斑病

降雨が続いたり、草勢が低下すると発生が見られるので、適切な肥培管理等を行い草勢維持に努め、予防防除を徹底する。なお、発病葉は取り除き、圃場外に持ち出し適切に処分する。

10. すいか

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 炭そ病	平年並
(2) つる枯病	

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在、つる枯病の発生量は平年並である。また、炭そ病の発生は確認されていない（平年初確認：7月上旬）。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 通風を良くし、過繁茂にならないよう栽培管理に注意する。

イ. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。

ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

(3) 褐色腐敗病・疫病

降雨が続いたり、圃場内に雨水が滞水した場合に突発的に発生することがあるので以下の対策を実施する。

- ア. 排水不良地では明きょを設置する等、排水対策を徹底する。また、すいかマットを設置し果実への感染を防止する。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。
- ウ. 発病果は直ちに除去し、適切に処分する。

11. メロン

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点細菌病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 6月28日現在の発生量はやや多い。(＋)
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発生が見られたら直ちに薬剤を散布する。また、発病程度の高い葉は取り除き、適切に処分する。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) つる枯病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月28日現在、発病は確認されていない(平年初確認：7月上旬)。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発生が見られたら直ちに薬剤を散布する。なお、薬液が株元にも十分付着するようていねいに行う。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

12. 秋冬ねぎ

(1) さび病

6月28日現在の発生量は平年並であるが、降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

(2) ネギアザミウマ

6月28日現在の発生量は平年並であるが、一部圃場では寄生株率の増加が見られる。今後、気温の上昇に伴って密度が高まるため、圃場をよく観察し、密度が高くなる前に防除を行う。なお、薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布を行う。

(3) ネギハモグリバエ

＜6月30日付け 発生速報第9号発表＞

6月28日現在の発生量は平年並であるが、一部圃場では被害度の高い株も見られる。今後、気温の上昇に伴って密度が高まるため、圃場をよく観察し、密度が高くなる前に防除を行う。なお、被害度の高い株が見られた場合は、「6月30日付け発生速報第9号」を参照し対応する。

13. きく

(1) アザミウマ類

6月28日現在の発生量は平年並であるが、気温の上昇に伴って密度が高まるため、圃場をよく観察するとともに以下の対策を実施する。

- ア. 圃場とその周辺の雑草にも寄生するので、除草を徹底する。
- イ. アザミウマ類はウイルス（TSWV）を媒介するため防除を徹底する。
- ウ. 薬剤散布は、薬液が茎頂部や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- エ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布する。

14. 野菜・花き共通害虫

病虫害名	対象作物名	予報内容
		発生量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり・すいか ・メロン・きく	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月28日現在の発生量はメロンではやや少なく、夏秋きゅうり、すいか、きくでは平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場周辺の除草に努め、圃場内への有翅虫の飛来を防止する。
- イ. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬液が茎頂部や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり・すいか ・メロン・きく	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月28日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が平年並か高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬剤が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

イ. 薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一薬剤の連用を避ける。

(3) オオタバコガ

6月28日現在、発生量は平年並であるが、本種は低気圧や前線の通過に伴って多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意するとともに以下の対策を実施する。

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努める。

イ. 幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が低下するので、若齢幼虫期に防除を行う。

ウ. 被害部位(果実、花蕾、新芽等)は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値(過去10か年の平均)を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3~5日早い
ややおそい	平年値より3~5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量(発生量、発生面積及び被害量等)

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →			← 平 年 並 →			← やや少ない →		←少ない→

東北地方 1か月予報 (06/26~07/25)

2021年06月24日14時30分 仙台管区气象台 発表

向こう1か月 06/26~07/25	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 06/26~07/02	気温	1週目は、東北日本海側で高い確率50%、東北太平洋側で平年並または高い確率ともに40%です。
2週目 07/03~07/09	気温	2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)

気温	東北日本海側	向こう1か月 06/26~07/25	20	40	40
		1週目 06/26~07/02	20	30	50
		2週目 07/03~07/09	20	40	40
		3~4週目 07/10~07/23	30	40	30
	東北太平洋側	向こう1か月 06/26~07/25	20	40	40
		1週目 06/26~07/02	20	40	40
		2週目 07/03~07/09	20	40	40
		3~4週目 07/10~07/23	30	40	30
降水量	東北地方	向こう1か月 06/26~07/25	20	40	40
日照時間	東北地方	向こう1か月 06/26~07/25	40	30	30

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)